

アゼルバイジャン共和国 「ひろしま・祈りの石」 贈呈式を終えて

この度、2015年10月14日から16日まで2日半と短い滞在ながら、「ひろしま・祈りの石」贈呈並びに贈呈式出席のためアゼルバイジャン共和国を初訪問しました。9月末日に訪問が決まってから2週間も無い出発ということで、アゼルバイジャン情報をほぼ持たない私たちでしたが、ギュルセル・イスマイルザーデ駐日大使閣下をはじめとする大使館員の皆様、また日本の外務省、在アゼルバイジャン日本大使館の皆様のご協力により、無事訪問目的の達成と有意義で充実したアゼルバイジャン滞在を終え帰国出来ましたことに感謝申し上げます。

ここで、今回の渡航目的である「ひろしま・祈りの石」の贈呈と、その石について触れさせていただきたいと思います。

「ひろしま・祈りの石」は1945年8月6日人類史上初めて、広島市に投下された原子爆弾を体験し、悲惨な場面、犠牲者を見て来た電車の敷石です。その石に、“平和を願う婦人像”と“From Hiroshima”の文字を彫り、世界共通の平和希求のシンボル「ひろしま・祈りの石」として平和の意義再考を願うため、全世界の国家元首に寄贈することを趣旨として、1991年5月にNGO「ひろしま・祈りの石の会」が発会しました。広島電鉄より払い下げられた約200枚の敷石1枚1枚に、戦争のない世界、平和への思いを込めながら掘り込んだ市民は延べ1

アゼルバイジャンへ贈呈された
「ひろしま・祈りの石」



アゼルバイジャン国立美術館に展示されている広島の子



首相、アブルフェーズ・ガラエフ文化観光大臣、高橋駐アゼルバイジャン日本大使をはじめ、約170名出席の贈呈式で目出度く披露されました。風雨にさらされない美術館の屋内展示をお選びくださった関係者の方々の想いを感じ、今後この祈りの石は“風の街”バクーの地で、アゼルバイジャンの皆様をはじめ、来館者の方々に世界平和のためのメッセージを、発信し続けてく

万人にわたり、7年の歳月をかけ「ひろしま・祈りの石」へと生まれ変わりました。

れるものと信じています。

被爆70年の今年、広島市民の想いが結集して四半世紀を迎える「ひろしま・祈りの石」は、2015年10月16日12時より、アゼルバイジャン共和国首都バクーの国立美術館内で109か国目の贈呈国として、エルチン・エフェンディエフ副

ここからは、短いながら充実した2日半を少しだけ紹介いたします。

私たちのアゼルバイジャン第1歩は、今年6月に行われた欧州オリンピック開催に向けて2年前に開港した近代的なヘイダル・アリエフ国際空港国際線ターミナルから始まりました。その空港からバ





天然の火が永遠に燃えるヤナル・ダグ

クー市内に向かえば30分程度ながら、先ずはお勧めいただいていたバクーと空港の途中にあるゾロアスター教遺跡に向かいました。聖地と崇められたこともあると言われるこの場所は、確かに紀元前より続く拝火教徒の歴史を感じることが出来る場所でした。やはり火の国だと話をしている時、ここから30分程度のところに、3000年間燃え続けている火

スラハヌ(バクー近郊)のゾロアスター教寺院
(17世紀)



の丘があると聞き、早速2か所目も火に纏わりとるところへと出発。そこには天然ガスが燃え続ける、雨にも風にも負けない火がありました。少し肌寒かったことも有り、火の温かさに感謝するとともに、人間にとって重要な火がいと容易く、しかも燃え続けているとは、やはり火の国アゼルバイジャン。貴重な半日の終盤には、アゼルバイジャン料理をいただき、その後、バクー市街とカスピ海を一望出来る殉教者の小路の丘から夜景を堪能して初日を終わりました。

2日目は、ゴブスタンの岩絵とバクー旧市街地散策。1万年前の人の暮らしぶりを絵にした岩絵の存在に驚き、旧市街地散策では、新旧が入り混じる街並みを感じながら、隣接する市(バクー市とゴブスタン市)同士がそれぞれ文化遺産を持つという共通点がある、我がまち広島(広島市:原爆ドームと廿日市市:宮島)とを重ね合わせ、また違いを

新規整備されたバクーの並木道夜景



感じながら発展を続けるバクーを楽しみました。そして、翌日本番の打合せを終え贈呈式モードで最終日を迎える準備をし、2日目を終わりました。

3日目は、いよいよ12時からの国立美術館での「ひろしま・祈りの石」贈呈式です。先に書いたように、多くの方々に迎えられた式典には、駐アゼルバイジャン日本国大使館の高橋大使にご参列、お言葉を賜り、厳粛且つ盛大に進められました。この度のアゼルバイジャン訪問に際し、駐アゼルバイジャン日本国大使館高橋大使をはじめ、館員の皆様にご支援ご教導を賜りましたことに対し、この場を借りて御礼申し上げます。

式典後には、国立美術館学芸員お勧めの絨毯博物館に出向き、絨毯の歴史や実演による製造の大変さを学びました。博物館後の旧市街地でお土産を買い求めたことは言うまでもなく、何よりメルシー・バクーと名付けられたブランドー、味も名前も最高でした。

最後に、この時期はとても素晴らしいですよと言われて訪問しましたが、本当

に過ごしやすいアゼルバイジャン・バクー周辺でした。充実した滞在でしたが、次回機会があれば、足を伸ばせなかった地方にも、一味違うアゼルバイジャンを堪能出来ることに期待して。◆

年10月
ひろしま・祈りの石の会

中石器時代の遺産、ゴブスタンの岩絵

